エッチはNGな幼なじみと露出プレイしてみた
小説 天戸祐輝
挿絵 cccpo
立ち読み版

一章　幼なじみは全否定っ!?　006
二章　お詫びの撮影はエッチな姿でっ!?　034
三章　僕は彼女に嫉妬して、彼女は僕に近づいてっ　076
四章　恥じらいだけど大胆にっ　135
五章　幼なじみが僕の趣味っ!?　190

登場人物紹介

Characters

御津妃真那（みつきまな）

主人公の幼なじみで、友達以上恋人未満の関係にある。成績優秀品行方正で根が真面目なため、性的な知識には疎い。同じ歳の悠一に対しては常に年上のように接するが、意外に押しに弱い。

相浦悠一（あいうらゆういち）

真那の幼なじみで、エッチなことに興味津々な少年。年相応に AV に興味があり、特に露出モノが好き。真那が好きだが、これまでの関係が壊れそうで踏み出せない。

「まさか『ここでやめて』なんて言うつもりじゃないよね。これからがもっとエッチで興奮できるんだから」

今にも「やめて」と頼んできそうな彼女の言葉を止め、アダルトBDを見せ続ける。

だが、エッチなことはまだ早い、と思っていた真那にはショッキングすぎる映像らしい。

画面の女優が喜んでペニスに奉仕する姿に、幼なじみはとうとう瞬きすら忘れて画面を見始めてしまった。太腿は尿意でも我慢するようにモジモジと動き、スカートの裾が徐々にずり上がっている。

（ヤバっ、こんなの観ながら真那のこんな姿見たら、我慢できなくなるかも）

意識しないようにしても、自然と幼なじみに目がいく。

初めてエッチを観る彼女の態度が気になって仕方がないからだ。

しかし、ただでさえアダルト映像で興奮しているのに、幼なじみまで艶めかしい行動をされたらたまらない。

どんなに我慢しようとしても、股間に血が集まっていく。

（マジでやばい）

ここで勃起してしまったら真那になにを言われるか分からない。

それこそ殴られ、「こんなものを持ってるからそうなるのよっ」とエッチなモノ関係のすべてを壊されるかもしれない。

悠一は最悪の事態を回避すべく、何とか興奮を鎮めようと窓の外に目を向けた。

「う、うそっ⁉」

空を眺めて数分、真那の驚きの声で目を画面に戻してみる。

するとシーンはとっくに変わり、裏路地からラブホテルでの３Ｐシーンになっていた。

裸の女優は騎乗位で肢体を上下させ、胸を千切れるほど揺らしながら秘孔と尻孔でペニスを咥え、嬉しそうに上気した顔で喘いでいる。

「えっ？　あ、ああ……」

それ以上の言葉が聞こえてこない。

エッチなことはまだ早いと思っている幼なじみにとって、アナルセックスなんて行為は想像もできなかったらしい。

しかも、三人でエッチをするなんて倫理外のことなのだろう。

身体は微妙に震え、呼吸が速くなっている。

（大丈夫かよこいつ）

刺激的な映像でショックを受けている彼女を心配しながらも、悠一はＢＤの映像よりも真那の姿に釘付けになっていた。

これだけエッチな映像を観て興奮しない人はいない。それは、性に疎い彼女だって同じことだ。

ただでさえ汗ばんでいた身体はさらに汗を掻いてブラウスを透けさせ、サマーベストのＶ字の襟元からはわずかに白いブラと柔房が見えている。

モジモジと擦り合わせていた太腿はいつの間にかスカートをずらし上げ、うっすらと染みを広げた白ショーツのデルタ部分が見えていた。
（ま、真那がこんなになるなんて）
興奮はするだろうとは思っていた。だが、ここまで明確な反応を見せるのは予想外だ。
幼いころからお姉さんぶり、正直面倒な女と思いながらも気になっていた幼なじみ。その女の子がエッチな映像で興奮している姿に、もう目が離せない。
『んあッ、あッあッあッ、出してッ、早く中に……イクッ、イクぅううッ！』
見えている白い下着がさらに濡れた瞬間、テレビから甲高い女優の声が聞こえてきた。
そこに目を戻せば、恍惚の表情を浮かべた女優が二孔同時中出しで肢体を仰け反らせて絶頂痙攣をしている。
汗まみれの男優たちは中出しだけでは飽き足らず、ペニスを引き抜いて残った精液を微笑む女優の胸や顔に引っ掛け、彼女を白濁まみれに汚していく。
「あっ……こんなの嘘よ……」
幼なじみの唇が震えている。
人に見せながら中出しまでさせる女優の姿にショックを受けた真那は、瞳を画面に吸い付かせたままユラユラと立ち上がった。
「こ、こんなの……あかちゃんできちゃうのに喜ぶなんて……」
よほど中出しがショックだったのだろう。

真那はフラフラとよろけ、壁にもたれかかった。
さすがにここら辺が限界だ。
悠一はリモコンのボタンを押し、女優が気持ちよさそうに秘孔と尻孔から白濁液を溢れさせているシーンで映像を止めた。
「ま、真那、大丈夫か？」
「え、あっ、うん。へ、平気……」
あまり平気そうではないが、ディスクを取り出しながら彼女に話しかける。
「あとは自分の部屋で観る？」
「う、うん……そうね」
「絶対に壊すなよ」
「当たり前……じゃないの」
真那がアダルトBDを見つめ、そのまま両手に持って力を込め始めた。
「お、おいっ。壊すなってっ！」
「う、うん、分かっている。大丈夫だから……」
どう考えても大丈夫そうにない。
悠一は慌てて彼女の手からディスクを取り戻そうとしたが一瞬遅く、彼女の手の中でバキッと音が鳴り真っ二つに割れた。
「ああ～～～～～～っ！　壊すなって言ったのに……」

「え？　あれ……？」
悠一の声でやっと我に返ったらしく、真那が無意識のうちに壊したＢＤを持ちながら見つめてきた。
「あの、ゆ、悠一。これ……」
割れたディスクを返されたが、さすがにそれを受け取る元気はなかった。

※

「あの、元気出して……」
ディスクを壊されてから数分。真那は自分で淹れてきた紅茶を飲みながら、必死に悠一に声をかけ続けていた。
「あ～～～～～～～～……」
しかし、元気なんか出ない。再びゾンビのようになって天井を見続けているだけだ。
「もう、どうしたら戻ってくれるのよ。なんでもしてあげるから元気になりなさいっ」
さすがに困り果てた幼なじみが、いつものお姉さん口調で話しかけてきた。
（なんでも……）
その言葉で、彼女の身体に目を向けてみる。
これ以上ＢＤを見せてもまた破壊される可能性があるし、弁償として買いに行ってもらうとしても、さっきのを見ただけであんな状態になった彼女には無理だろう。
「なんでもしてくれんの？」

「え、ええ。どんなことでもしてあげるわっ」
さすがに少し悪いと思っているらしく、幼なじみが美峰乳を張って答えた。
（すごく大きいよな……）
カップサイズは昨日聞いたが、改めてその大きさを前につい見つめてしまう。
できることならその胸、いや真那のエッチなところを見てみたい。そんな思いに駆り立てられた。
「真那、本当になんでも聞いてくれんの？」
「くどいわね。わたしが嘘を言ったことなんてあったかしら？」
「だ、だったらさ、エッチなことしているところ撮らせてよ」
「そ、そんなっ!?」
無駄だと思いながらも言ってみた。
当然そんなことを言われるとは思ってなかったのだろう、真那は制服の上から胸や大事なところを押さえ、困惑した表情を浮かべている。
「そ、そんなことできるわけ……」
「やっぱりできないよな、真那がエッチなことをできるわけないんだ。なんでもするって言ったのに、結局は俺に嘘をついて……」
もともと分かっていたことだ、エッチなことを頼んでも彼女がしてくれるはずがない。
しかし、真那は少し悩んだあと、小さな声で話しかけてきた。

「わ、わたしが悠、悠一の言うとおりにえ、エッチなことをすればいいのよね」
「え？　ああ、どうせできないだろうけど」
「い、いいわっ、やってあげるわよっ。悠一の望むとおりにしてあげるわっ！」
「……え？　えぇえええええっ⁉」
まさか彼女がこういう頼みに応じるとは思ってなかったため、さすがに驚いてしまった。
しかし、「やっぱりできない」という言葉にムキになった真那は、本気だとばかりに机の上に置いてあったムービーカメラを悠一に手渡し、悩むことなくベッドに乗ってアヒル座りになっている。
「おまえ本気じゃ……」
「ど、どうすればいいの？　し、下着でも見せれば……」
顔を真っ赤にさせた幼なじみが、言葉を詰まらせながらそっとアヒル座りの太腿を広げ始めた。
その姿に本気だと分かった悠一は、慌ててカメラのスイッチを入れて白いショーツを見せ始めた彼女にレンズを向ける。
小型の液晶画面には、制服姿のまま下着に包まれたデルタ部分を晒した美少女が映り、真っ赤な顔でこちらに視線を向けている。
「悠一が、悠一がかわいそうだからこんな……、こんなことするんだからねっ」
先に言い訳をした真那が、そっとサマーベストを胸上までずり上げてブラウスに包まれ

た大きな柔房を張ってきた。
（うわっ、見えてるよっ。下着が透けて……ゴクっ）
思わず生唾を飲み込んでしまう。
下校時の暑さとアダルトBDの視聴で、彼女は相当興奮して汗を掻いていたらしい。
ブラウスは完全と言っていいほど透け、大人しめながらも清純さを感じさせる白いブラジャーが丸見えになっていた。
大きな柔房や谷間もはっきりと見え、悠一は思わずアップにして撮影してしまう。
真那はカメラを気にしながらもブラウスのボタンをすべて外し、白いブラに包まれたお椀型の美峰乳と透き通るような肌を見せてきた。
「すごいスタイルだよな……」
自然と声が出てしまった。
幼なじみのスタイルは同年代の女子と比べても別格だ。
胸やお尻は大きいのに腰はキュッとくびれてて全体のラインも細く、太腿はムチムチとしているのに脚が長いためにそれを感じさせない。
顔だって大人びてて可愛らしい美貌で、それだけでも十分人を惹き付ける魅力がある。
幼いころからの性格さえ知らなければ、文句一つつけようのない美少女なのだ。
男女問わず、学園生に人気があるのもうなずける。
「ま、真那。こういうのお決まりで、プロポーションのサイズとか言うのが普通なんだ

けど」
「も、もう。そんなことまで言わせるなんて……、バスト87のE、ウエスト59、ヒップ88よっ」
顔を真っ赤にさせている幼なじみが、早口でサイズを教えてくれた。
「も、もうそんなことはどうでもいいでしょうっ。こ、これからどうすればいいの？」
「じゃ、じゃあ。おっぱいを揉みながら、アソコをさわってみて」
「っ⁉　わ、分かったわ……んっ、んぅ……んはっ」
悠一の要望に少し驚いた彼女は顔を真っ赤にさせ、薄く瞳を閉じて左の柔房を揉み、右手の指をショーツに這わせ始めた。
下着越しとはいえ恥ずかしすぎるその姿に、彼女は唇を噛み締めながら吐息を洩らして声をこらえている。
（本当にするなんて……）
自分の言うことを聞いてくれるとは思わなかった真那が、実際にオナニーを始めてくれた姿に緊張してしまい、手が震え始めてしまった。
もしカメラに手振れ機能がなければ、艶めかしい姿の彼女の姿をまともに撮影できていないほどだ。
カメラの液晶にはブラ越しの左胸をわずかに揉み歪ませ、ショーツのデルタ部分で何度も指を往復させている下着姿の美少女が映り、まるで「早くさわって」と誘惑されている

気分になってしまう。

「これだとさっきのBDみたいじゃないから、悠一だから仕方なく見せてあげるんだからね……っ」

可愛らしい声で呟いた直後、幼なじみは覚悟を決めたように一気にブラジャーをずり上げ、お椀型の瑞々しい柔房を見せてきた。

幼いころ、まだ彼女の胸やお尻がペタンコだったころに、その起伏もない裸を見たことはあった。だが、今はまったく違う。

Eカップの肉果実は呼吸に合わせて艶めかしく揺れ、乳肌が光を反射させている。小さなころは肌の色と見分けがつかなかった乳首は薄いピンク色に色づき、先ほどの映像で興奮した頂が小指の先大になって尖り、悠一に向かって主張をしているようだ。

映像ではなく初めて生で見たおっぱいに悠一は言葉もなく見入り、恥ずかしそうに細眉を下げる顔と隠すものの肉果実を集中的に撮影してしまった。

「ど、どう……かな？」

「どどど、どうっ……て？」

「だから、その、わたしの胸……綺麗……かな？」

「綺麗だよ、すごく綺麗だっ」

その言葉だけは素直に出た。

嘘はない。真那のおっぱいは世界一と言っていいほど綺麗だ。

形も大きさも文句のつけようがなく、なによりも乳首の色が今まで見たことがないほど薄くて乳輪も小さい。
主張している頂も小刻みしていて可愛らしく、ついさわってみたいという衝動に駆られてしまう。
「よ、よかった……んんっ」
褒めた言葉にホッとしたように少し微笑んだ真那は、今度は右手で肉果実を揉み上げ、左手の指を淫部に這わせ始めた、
「んあっ、ふぁんんっ！」
突然甲高い声を奏でた彼女の姿に視線を釘づけにしてしまう。
無意識にショーツ越しの陰核に触れてしまった幼なじみが、艶めかしく顎を仰け反らせながら感じているのだ。
白いショーツには染みが広がってふっくらとした淫唇を透けさせ、その割れ目では薄赤い色まで見えた。
（見えてる、アソコ……アソコがこんなに……）
初めて見る光景に緊張してしまった。
もしこれがBDだったら、間違いなくモザイクがかかっているはずだ。
その初めて見る女の子のアソコの形に、悠一の心臓はドクンッドクンッと鳴り響き、全身の血流がものすごい速度で身体の中を駆け巡っていく。

「もう目移りなんかさせないから、わたししか見えないようにさせてあげるから……んっ」
「んんっ⁉」
悠一の首に両腕を絡めてきた真那が突然唇を重ね、舌同士を絡ませ合わせてきた。
狭いロッカーの中はキスの音が響き、今にも外に聞こえてしまいそうだ。
「（悠一、ここでしよう）」
「（で、でも外にまだ）」
「（いいから、お願い）」
首に回した腕に力を込めてきた彼女の姿に、エッチしたいという欲求が強くなってしまった。
外に居る女子部員のことは気になる。
気にはなるが、誘ってきた彼女を拒むことなんかできない。
悠一は狭く暗いロッカーの中で桃尻を抱え、強引に駅弁の体位にして彼女の入り口を探り当てる。
「（ゆっ、悠一そこ……っ⁉）」
「（いくぞっ）」
感触だけで肉輪の場所を見つけ、一気に押し込もうと腰を突き上げた。
ぎゅりゅぷっ、ぎゅぷぎゅぷぎゅぷっ！
「（ばっ、ばかそこは――――っっっ！）」

挿入したと同時に、熱い壁が強烈な締め付けでペニスを包んでくる。
しかし、さっき感じていたザラザラとした襞の感触がない。ただきつく、精液を搾り取るような強い蠢きがあるだけだ。
（な、なんか真那の中が変だ）
ペニスに感じる痛いほどの締め付けに気持ちよさを感じつつも、違和感を覚えて彼女を見てみると、苦悶の表情を浮かべて肢体を震わせていた。
「（真那？）」
早くも肉幹に感じてきた痺れに我慢しながら訊いてみると、幼なじみは涙をいっぱいに溜めた瞳で見つめてくる。
「（違う……はぁはぁ……そこ、違う……）」
ロッカーの外に人が居るため、今まで小さくしていた声の音量を少し上げて彼女が囁いてきた。
なにが違うのかと見てみれば、先ほどまで挿入していた秘孔が彼女の胸の谷間越しに見えている。
「（ごっ、ごめんっ。まさかお尻だったなんて、今抜くから）」
この体位で秘孔が見えるということは、ペニスを挿入してしまったところはもう一つのところしかない。
慌てて抜こうと肢体を持ち上げようとするが、真那はそれを拒むかのように抱きつき、

さらにお尻を押し付けてくる。
「(い、いいから。このままでいいから、思いっきり……)」
桃尻をくねらせて腸壁でペニスを擦ってきた彼女の姿に、理性がふっ飛びそうになる。
腰は誘われるまま前後に動きだし、狭いお尻の中をゆっくりと突き上げ始めた。
「(すごい、腰がとまらなくなりそう)」
「(はふっ、た、たぶん……も、もう大丈夫だと思うから、思いっきり動かしても、もう平気だから)」
額から脂汗を流しているのに、平気なわけがない。
だが膣よりも強い締め付けに、腰を動かさずにいるなんて不可能だ。
悠一は外の様子を窺い、まだ裸のまま会話をしている女子部員が居ることを確認しながら真那にキスをし、その肢体を思いっきり抱きしめた。
「(ごめん真那、我慢できないから、我慢できないから動くよっ)」
「(え、ええ……はうっ！　ふはっ、んふっ、はひっ、はふぅうっ！)」
我慢できずに腰を動かし、異質な挿入音とともにペニスをピストンさせた。
ペニスに焦燥的な痺れが走る度に幼なじみの唇からは押し出されるように息が洩れ、大きな肉果実が重量感を物語るように上下に揺れる。
肢体は小刻みに震えだし、大粒の汗が彼女の全身を艶めかしく彩る。
「(んんんっ、うん……はふっ、なんか変……お尻なのに……お尻なのにわたし……はふっ、

んっ、あっ、ふぅあああっ！　んっ、んぅううう……）」

突然彼女が甘い声を奏で上げそうになった瞬間、悠一は急いで唇を重ねてその声を抑えさせた。

外にはやっと水着を取り出した女子部員たちがまだいるのだ。

「（真那、こ、声抑えて）」

「（わ、分かってるけど……んっ、でちゃう……声、悠一の所為で……っ）」

注意すると、幼なじみは何度もうなずきながら唇を噛み締めて声をこらえる。

しかし、身体の疼きは抑えられないらしい。

真那の肢体はフルフルと震えだし、ペニスのピストンに合わせて激しく桃尻を動かして淫らな挿入音を大きくさせる。

「（真那、おまえもう……うっ、くああっ）」

「（だって、だってまだ身体が敏感だったから……だからこんなに……はうっ、お尻の中がすごく……すごく痒くて……わたし、わたしぃいいっ！）」

彼女が早くもお尻で感じ、艶めかしく声を上げる。

悠一に抱き着いた肢体は迷うことなく上下に動き、早く精液を搾り取ろうと腸内がザワザワと蠢いて肉幹に貼り付いてくる。

「（んぁあああっ、おしりで、お尻でこんなによくなるなんてっ）

真那が長い髪を振り乱し、桃尻を大きく振ってペニスに腸壁を擦りつけてきた。

腸内の変化に呼応するように尻孔は蠢き、秘孔のように捲れ返りながら肉幹の締め付けを強くさせている。
「(くあっ、ちょっと真那、少し、少しお尻緩めてよ)」
「(ど、んぅ……どうやれば、こ、こう?)」
「(くぁああっ!)」
悠一に答えてお尻をくねらせながらも腸内の締め付けを緩めようとしてくれたが、逆に腸壁全体がうねってさらなるムズ痒さをペニスに走らせてきた。
もう荒々しく突き上げたい衝動を抑えられない。
悠一は身体がぶつかって音が鳴らないように肢体をロッカーの内壁に押し付け、お腹を淫部に叩きつけながら狭い腸内を貫き始めた。
「(あふっ、すごい……すごいよ悠一っ、お尻なのに……お尻なのに痺れて……あふぁッ、あふっ、あっあっあっ、ひゃふぅううっ!)」
声を抑えて喘いだ真那が肢体を痙攣させ、長い髪を振り乱しながら乱れている。尻孔を激しく貫く度に秘孔からは濃い女蜜がコプコプと溢れ、お尻の割れ目に伝ってペニスを濡らし滑りをよくしていく。
「(ふぅんンっ、悠一気持ちいい? わたしのお尻なんかで気持ちよくなってるっ?)」
「(いいよ、すごく気持ちいいっ、狭くって……真那の身体どこも全部よくて、くっ、ここも……ここもすぐに出して俺のものにするからなっ)」

「（ふぅあうっ！　出されるの？　お尻にも……お尻も悠一のものに……出して悠一っ、早く出してわたしの全部を悠一のものにしてっ！）」

じゅりゅぷっ！　じゅにゅっじゅにゅっじゅりゅっ！

彼女の言葉に、悠一は無我夢中で尻孔を突き上げ始めた。

真那のすべてを自分のものにできる感覚が欲しくて仕方がない。

彼女のお尻が壊れるような勢いで腰を振り始めた悠一は、何度もキスを繰り返しながら両手でお尻を揉みまくった。

ゴトッ！　じゅりゅっじゅりゅっじゅりゅっ。

「（ゆ、悠一っ⁉）」

興奮のまま激しく突き上げたのが災いし、幼なじみの肢体がロッカーの内壁にぶつかって音が鳴ってしまった。

しかも、興奮と快楽に量を増した愛液が溢れ、お尻に伝って挿入音まで大きくしている。

『あれ？　なんか変な音聞こえてこない？』

『そうね、なんか水の音みたいだけど……』

異質な音に、まだ裸の女子水泳部の二人が怪訝な表情になり、悠一たちが身を隠したロッカーを見つめてきた。

『だ、誰かいるの？』

タオルで肌を隠した水泳部の女子が、怯えた表情で近づいてくる。

「(ふぁうっ、あふっ、き、気付かれちゃう……っ)」
濡れた吐息を洩らし、切なげに美貌を染めた彼女が潤んだ瞳で見つめてきたが、絶頂間際で腰の動きを抑えることなんてできない。
「(ゆ、悠一……)」
「(ごめん真那、もう、もう止められない)」
「(う、うん)」
瞳を見つめて囁いた言葉に、見つかる覚悟を決めた彼女が静かにうなずいてくれた瞬間だった。
『あっ、そういえば、この更衣室の下ってプールの浄水管が通ってるって前に先輩から聞いたことある』
『そうなの? 驚いちゃったよ私、ずっと変な音鳴ってるんだもん。お化けでもいるのかと思っちゃった』
間一髪、水泳部の女子たちの勘違いで救われた。
「(悠一、もっと……もっと激しくしても)」
「(あ、ああっ)」
淫水音を浄水管の音と勘違いされているなら気にすることはない。
真那も同じことを思い、少しでも早くエッチを終わらせようと肢体を痙攣させてきた。
射精をさせるために締め付けを強くした腸内は、ペニスを潰してしまうように壁が肉幹

を包んで蠕動し、強烈なムズ痒さをペニスの内部にまで感じさせてくる。
「(うあっ、ヤバいっ、もう出る……出すよ真那っ、真那のお尻に、お尻にも俺のを……)」
「(う、うはうっ、出して悠一早く、早く出しなさい悠一っ！　早くしないと、わたしが、わたしが先に……っ)」
背徳的なお尻でのエッチ、しかも外に誰かが居るこの状況に真面目だった彼女が興奮を高め、肉体の疼きに我慢ができなくなったらしい。
真那は何度も精液を求めて小さな声で喘ぎ、本格的に肢体を半痙攣させ始めた。
肢体の痙攣は腸内にまで伝染し、強烈な締め付けと蠕動に加え腸壁全体まで震える。
焦燥的な悦くすぐったさに襲われたペニスは限界まで膨らみ、内部に濁液が上っていく痛痒い痺れが全身にまで伝わってくる。
「(くうっ、出るっ、真那出るよっ)」
「(来てっ、早くっ、早く悠一ぃいいっ！)」
肉幹が激しく脈動し、濁液が切っ先にまで駆け上ってきた。
悠一は彼女の名前を呼びながら激しく腰を動かし、声が出ないように唇を重ねながらさっき失敗した中出しをするため、思いっきり尻孔を貫いて肉幹の根元まで打ち込んだ。

「(ゆ、ゆふひひっ、こふぁれ……あうっ！　あひっ、ひゃっひゃふっ、はふっ、ふぅんンんんンんんんンんン――――――っ！　っ！)」
びゅぷっ！　びゅりゅびゅぷびゅりゅびゅるっ！
今までで一番強く尻孔を貫いた瞬間、真那の肢体が一気に絶頂に昇って痙攣硬直し、ペニスを押し潰すほど締め付けながら激しく蠢きたった。
そのあまりのムズ痒さと強烈な痺れに、肉幹は我慢する間もなく激しく脈動し、濃厚な精液をお尻の中に迸らせていく。
鈴口に痛悦感を走らせながら飛び出した精液は、そのままの勢いで真那の腸壁にこびり付き、ゆっくりと出口に向かって伝い始めた。
唇で押さえられた声は二人の口腔で響き合い、すべてが一つになっているような感覚が肉体を包んでくる。
「(はぁうううっ！　熱いっ……熱いよ悠一っ、お尻……お尻火傷しちゃう……わたしのお尻悠一ので火傷しちゃうぅぅうう――――――っ！)」
「(くぅああっ、うっ、くううっ！)」
さらに腸内がきつくなって蠕動し、尻孔から奥に向かって大きくうねってきた。
まるで精液を搾るためのような動きに、ペニスには強烈な痛痺れが走って半ば強制的に濁液のすべてを射精させられてしまった。
頭の中が真っ白になってしまうような気持ちよさに、悠一は呆然としながら汗まみれの

彼女を抱え、その大きく揺れる柔房に顔を埋める。
「(あふっ、あっ……はぁはぁはぁ……悠一……)」
真那ももう動けないようだ。
二人は狭いロッカーの中で崩れ落ちることもできず、駅弁の体位のまま引っかかるようにして荒い呼吸を繰り返している。
「真那……」
「んっ……んん……」
胸から顔を上げ、貪るように唇を重ねて舌を絡ませる。
腰は名残惜しいようにゆっくりと前後に動き、まだ硬いままのペニスを精液でぬらつく腸内でピストンさせた。
「ンっ、んぅ……んっ……ンふぁ……はぁはぁはぁ……悠一」
絡ませた舌からキラキラと光る橋を架けながら唇を離すと、真那が幸せそうに微笑みながら見つめてきた。
「もう……いなくなったみたい……」
「え？　ほんとだ」
彼女に言われ、悠一は初めて水泳部の女子たちがプールに行ったことに気づいた。
「こ、こんなとこでもしちゃうなんて……」
照れくさそうに微笑んできた幼なじみの姿に、好きという気持ちが高まっていく。

「真那、ずっと……ずっと好きだった。だから、だから俺の彼女に……」
「お、おそいよ悠一、こんなことしてから告白だなんて……、で、でも嬉しい。もうわたしは悠一の彼女……でいいのよね」
「あ、ああ」
心の底から幸せそうに笑った彼女に答え、呼吸に合わせていた大きな肉果実を揉む。
「もう、また揉むなんて……でも、わたしは悠一のものだから……」
その言葉に嬉しさが込み上げる。
目を下に移せば、抜群のプロポーションの肢体が一糸まとわぬ姿である。
そして、そのすべてで悠一は気持ちよくなり精液を放ったのだ。
「真那……くちゅ」
もう一度エッチしたいが、そんな時間などない。
悠一はしばらくのあいだ真那と舌を絡め、胸を揉みながら「好きだ」という気持ちを伝え続けた。

久々の痛みをお腹に受け、目覚めさせられた。
「お、おまえ……どういう起こし方を……」
苦痛に顔を歪めながら訊くが、彼女は腕組みをしたまま「当然よ」とばかりに頬を膨らませている。
「で、なんの夢見てたの？」
「夢って……？」
なにも覚えていない。
ただ幸せな夢だったような気はする。
「なにも覚えてない」
「ほんとかしらっ」
本当のことなのだが、彼女は「信じられない」とばかりに頬を膨らませ、ぷいっと顔を背けた。
「まあいいわ。それよりも早く着替えて、デートするわよ」
「……はぁぁぁぁぁぁっ!?」
話が急すぎる。
しかし、真那は悠一が理解するのを待っても仕方ないとばかりにタンスから服を取り出し、手渡してきた。
「いきなりだな出かけるって……はぁ、まあいいけど、でもまだ早すぎるだろ」

寝ぼけた頭だが、デートに行くことには納得した。だが、時間が早すぎる。
時計は八時三十分と表示されており、今から出かけてもデートで利用するような店は開いてない。
「支度して出かけるにはちょうどいい時間でしょう。今日は色々したいことがあるの、だから早く着替えてよね」
そう言った真那は、そのまま下のリビングに行ってしまった。
「なんなんだ、あの態度？」
妙にソワソワした幼なじみの姿に困惑しながらも、悠一は彼女が選んだ洋服に着替え始めた。

※

昼食を済ませた悠一と真那は、休日で賑わう街中を並んで歩いていた。
今までも二人で出かけたことは多々あった。だが、恋人になってから二人で出かけてきたのはこれが初めてだ。
どことなく気恥ずかしく、緊張しながらも変に浮かれている。
「なにか話してよ」
「なにかって言われてもなぁ……」
思いつかない。
今まで普通に会話できていたのに、彼女になった幼なじみとデートしているというだけ

で、こうも違うものなのかと実感してしまうほどだ。
隣を見てみれば真那も同じ気持ちらしく、緊張した面持ちながらもどこか嬉しそうだ。
頬も少し染まり、何度も視線を合わせては照れくさそうに周りの景色を眺めている。
（やっぱり、目立つよな……）
真那の横顔を見ながら、ふとそんなことを思ってしまう。
二人で並んで歩いているだけなのに、周りの男たちが必ずと言っていいほど幼なじみを眺めているのだ。
幼さを残す美貌も目立つ要素でもあるが、サマーワンピに淡い水色のブラウスを羽織った身体も、目立つもう一つの要素だ。
ただでさえスタイルがいいのに、薄手の服のおかげで胸や太腿が異常なほど目立ち、周りの目を集めている。
（見られたくないけど、なんか嬉しいような……）
「ね、ねえ」
「ん？　なに」
「だから、なにか話してって」
真那の容姿に改めて見惚れていたら、再び会話を求めてきた。
今までなら会話なんかしなくても普通に歩けていたのだが、さすがに今日はなにか話してないと気分が落ち着かないらしい。

（話ね……なんかないかな？）
と、会話のネタになりそうなものを探してキョロキョロとしてもろくなものがない。
目についたゲームセンターの話をしようとしても、そういうところに一切出入りしない彼女はなんのことを言っているか分からないだろうし、さっき食事をしたばかりでファストフードに入るわけにもいかない。
唯一真那が興味ありそうなアパレルショップに入ったとしても、そこでは悠一がなにも分からない。
「真那、どこか行きたいとこないのか？」
困ったあげく、彼女に行きたいところを訊いてしまった。
「……あるわ」
予想外の返事に気持ちが楽になる。
彼女が行きたいところがあるなら行き先に迷うことはないし、そこに関する情報を聞くことで会話だってできる。
「そ、そうなんだ。で、どこ？」
「あそこ」
気分揚々と尋ねてみると、どうやらその場所は近かったらしい。
真那は目的の場所に指をさして立ち止まった。
「へえ、意外と近かったんだ、で真那の行きたいところって……」

言葉が出ない。
彼女の指は悠一がよく行くアダルトショップをさしていた。
「どうしてあんなとこに。デートで行く場所じゃないと思うんだけど」
「だって、わたし一人では入れないでしょう」
「ま、確かに入れない、というか入りづらいだろうけど……」
あんなとこに行きたい意味が分からない。
ああいう店に行く女の子はまれに見かけるが、真那が入るのは間違いなく場違いだ。
「どうしてあんなとこに行きたいんだよ」
真那とアダルトショップが結びつかず、素直に理由を尋ねてみる。
「だ、だって、ああいうところに悠一の好きなのが売っているから、一度見て……も、もうっ、そんなことどうでもいいでしょうっ」
突然話を打ち切った彼女が悠一の手を取り、店員やお客が驚くのも無視して店の中に入り、裸の女の子がパッケージになったBDやDVDが並んだ棚の中を進んでいく。
「お、おいっ、どうして。そんなに急がなくったって」
「だ、だって、恥ずかしいじゃないっ」
恥ずかしい。というより勢いをつけなければ入れなかったらしい真那は、少し頬を染めて物珍しそうに周りを見回し始めた。
「こ、こんなところでいつも買っているの？」

「いつもというわけじゃ……」
ない。と言えないところがつらい。
しかし、そう言った彼女もそれ以上はなにも訊いてこない。
たくさんの裸の女の子のパッケージに囲まれた場所で、実在する女の子は幼なじみ一人。
当然お客たちの目が興味本位に彼女の様子をチラチラ窺っている。
「い、いろんなものがあるのね……」
さすがに恥ずかしいようだ。
真那の顔は赤く染まり、周りから集まる視線に身体をモジモジとさせ始めた。
瞳は様々なタイトルを見ては離れ、大人のオモチャが置かれている場所へと近づいていく。
「こ、これって……アレよね」
バイブやローターが多く並んだ場所で彼女は振り返り、恥ずかしそうにしながら尋ねてきた。
だが、答えを求めているわけではなさそうだ。
ローターを挿入した時のことを思い出したらしく、瞳は一つの箱を見つめながら太腿をモジモジと擦り始めている。
「大丈夫か？」
「う、うん……でも」

大丈夫とは言っているが、なにか様子がおかしい。
「ゆ、悠一……ちょっとこっちに来て」
再び手を引かれ、棚が密集した場所に入り込んでいく。
お客たちもなにかあったのかと興味がってはいるが、さすがについては来ず、悠一たちは棚が入り組んだ場所で二人っきりになることができた。
「どうした？」
「どうしたって……だから」
「だから、なに？」
彼女が自分から「興奮してる」とか「視線で感じた」という言葉を言わないのは分かっている。
それが分かったうえで訊いてみたのだが、真那は「どうして分からないのよ」と非難めいた視線で見つめてくる。
「ゆ、悠一がこんなに意地悪だったなんて……」
一瞬拗ねたように頬を膨らませて唇を尖らせた幼なじみは、近くにあったＤＶＤを手に取って見せてきた。
「こ、これと同じこと、こ、ここでしてあげてもいいわ」
「これと同じことって……っ!?」
大きな声で驚きそうになってしまった。

こういうところに置いてあるＤＶＤと同じことといえば一つしかない。
周りにお客はおらず二人きりだからといって、上を見れば監視カメラだってある。さすがにこんなところでエッチなんてできるわけがない。
「で、でも悠一そういうの好きだから、わたしなら……ほら」
しかし、悠一が止めるのも無視して、照れ笑いを浮かべた真那がサマーワンピの肩紐を落とした。
「うわっ⁉　そ、その下着って」
真那が着けている下着といえば、大人しいものか少し大人びた可愛らしいデザインのものという印象があったのに、今日のは違いすぎる。
「こ、これ、見せたかったんだけど……ど、どうかな？」
「う、うん。すごくいい」
彼女がつけているのは黒レースのコルセットブラだった。
しかもハーフカップの面積が小さいため、ただでさえ透けている薄ピンクの乳首が今にも飛び出しそうだ。
大きな柔房のふもと部分には黒いフリルまでつけられ、真那の魅力的な美峰乳をさらに引き立てている。
「こ、こういうの好きみたいだったから」
「あ、うん。すごいエロくていい……いいけど」

「いいけど？」
こんなところで誘惑されて悪い気はしないが、いつ客がここに来るかもしれない不安で気が気ではない。
「他の人なんて気にしないで、ゆ、悠一、露出が好きだから、わたしがすれば他のなんて見なくてもいいと思って買ったんだから」
「あ、ああ……」
確かに彼女がセクシーな下着を着けて見せてくれるのなら、アダルトBDなんて必要ないのかもしれない。
悠一は自然と幼なじみだけを集中して見てしまい、スカートの中も気になり始めてしまった。
（ブラがこんなにエッチなら、下も……）
「もちろんショーツも同じデザインだけど……み、見る？」
悠一の考えを読み取った彼女が、少しスカートを摘まんで持ち上げ。黒レースのショーツを見せてきた。
ゴクッ……。
生唾を飲み込んでしまう。
予想以上にエロいハイレグショーツだった。
面積は小さく、半分ほど透けて薄い草むらが見えている。それだけならまだしも、わず

かながら小さな肉芽も見えているみたいだ。
黒いストッキングだと思っていた細い美脚を包んでいるものはガーターベルトにつけられ、予想以上に彼女の下半身を色っぽく、そして艶めかしく彩っている。
「んん……見てる？」
「ああ」
彼に黒い下着を見られる羞恥に、幼なじみが肢体を震わせて俯いた。
悠一の視線は下着を露出させている幼なじみの胸や淫部、太腿を見つめては離れ、彼女が自ら下着を露出させている姿を記憶していく。
「ゆ、悠一……わたしも悠一に……」
「ま、真那……ううっ」
幼なじみの手がズボンの股間に触れてきた。
「もう大きくなってる」
もどかしすぎる刺激に、彼女の掌にペニスを押し付けるように腰を動かしてしまった。
ここが普通の場所ではないことは理解している。
だが彼女も収まりそうにない。
悠一もここ数日の彼女との関係のおかげで、少しの刺激だけで我慢できなくなっている。
手は自然と幼なじみの肉果実に触れ、セクシーなコルセットブラごと揉んでその柔らかな感触を楽しんでしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!